

## 解説「E.FORUM スタンダード 英語科(第1次案)」について

赤沢 真世(立命館大学・准教授)

## はじめに

中学校および高等学校を通して、英語科として育成すべき学力の本質とは何か。E.FORUM スタンダードでは、英語科全体を貫く包括的な「本質的な問い」を「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の領域ごとに示した。そして、問いに対応する永続的理解とパフォーマンス課題を例示した。なお、便宜上中学・高校と分けて記載したが、両者は一貫したものである。またそれぞれ3つのレベルを設定したが、各学年にそのまま対応するのではなく、生徒の実態に応じて捉えられる。

## 1. 英語科におけるスタンダード開発の意義

包括的な「本質的な問い」として、第一義的に位置づけるのは、「英語を通して、他者とのよりよいコミュニケーションを図るにはどのようにすれば良いのか」という問いである。さらに、そのコミュニケーション能力の育成を支える土台として、言語構造への着目や異文化理解の側面を位置づけ、「英語(外国語)や異文化を学ぶことの意味や魅力とは何か」という問いを立てた。これは学習指導要領における英語科の目標と対応している<sup>1</sup>。留意すべきは、各パフォーマンス課題において、コミュニケーション能力の育成が第一の目標として掲げられるなかで、ただ発表させればよい、という活動主義的な取り組みに陥らないよう、その課題を達成する過程においてどのような言語構造の理解や異文化理解が組織立てられていくかを吟味することが求められる。

また、本スタンダード案は、近年注目される Can Do リストのように各レベルでの Can Do の姿を示すのみではなく、そのレベルで理解させ

る内容やポイント、そして成果を見るパフォーマンス課題を具体的に挙げることで、指導の指針として有効に活用できるのではないかと。

## 2. 各領域の区別とパフォーマンス課題の対応

スタンダードでは、学習指導要領に即して4技能ごとに(「話すこと」はさらに2つの領域へ)分類し、各領域における「本質的な問い」を表し、パフォーマンス課題例を示した。新学習指導要領では、聞くこと・話すことの相互的(interactive)指導だけではなく、領域固有の指導についても意識されているからである。

ただし、英語科のパフォーマンス課題の場合、その領域の枠内のみには位置づけるものではない。現実世界の文脈を意識したパフォーマンス課題では、課題を成し遂げるために複数の領域の能力が必要とされる。実はこの点こそが、英語科におけるパフォーマンス課題の大きな意義の一つなのである。例えば、英語のニュースを「聞く」活動を踏まえて英語でクイズを作る(「書く」)能力、発表では「読む」「話す」能力も要求される。このように、領域ごとに配置されたパフォーマンス課題は、その領域のみに収まる活動ではないことが重要な特徴である。

さらに、「本質的な問い」や「永続的理解」は、従来の英語科で課題とされていた側面、すなわち新学習指導要領で新たに加えられている内容に焦点を当て、課題を例示した。例えば「まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞きとること」「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること」である。また「つなぎ言葉」の指導などの「方略的能力」の育成が一

定位置づけられ、その場に応じた即興的な理解力、発信力が求められている（スタンダードにおいて「話すこと」の領域をあえて即興的な「情報のやりとり」と準備した上で臨むことの多い「表現」に分割したのもこの理由からである）。

### 3. 各レベル間の深まりと課題提示の幅

「本質的な問い」やパフォーマンス課題は、中高6年間を通じて長期的な見通しを持ったカリキュラム設計・授業設計において一貫した軸として位置づく（ただし、重み付けが異なってくることはある）。そのため、第一次案では、必要となる言語表現や言語構造を個別に記すのではなく、文構造や表現の仕方という、やや大きな視点の深まりを記載している。

具体的には、スタンダードの各レベルを領域ごとに記載するにあたって、学習指導要領の指導内容等の記述、さらに CEFR（『ヨーロッパ共通参照枠』）の Can Do リスト<sup>2</sup>を参照し、①扱う教材や場面の幅を軸にしている。一方で実際の指導に当たっては②課題の提示の仕方によって難易度を変化させることができる。そこで、次に①②の点について少し説明を加えたい。

まず、①扱う教材（場面）の幅、すなわち何を題材とするかによってスタンダードのレベル（パフォーマンス課題の難易度）が高まると考える。例えば、「電話での応対」をパフォーマンス課題として設定した課題（「情報のやりとり」を主に行う「スキット」）は、より高次の課題「ディベート」（例：「制服は必要か」）につながる<sup>3</sup>。身近な話題からやや公的な話題に、そして必要とされる論理性も一段高いものへと、レベルの高まりにつれて発展する。また、「書くこと」では、身の回りの出来事を書くことから、自分の意見や考えを書く、そしてアカデミックな論説文を書くことまで、課題の内容が深まっていく（高等学校では伝える内容の高度化、アカデミック化が特に意識されている）。さらに目的や文

脈が定められている課題から、目的や文脈に応じて必要とされる文構造や表現を駆使しながら発信する課題へと深まる道筋もある。こうした深まりを念頭におき、「本質的な問い」と「永続的理解」を記している。

次に、生徒の実態に応じて工夫が求められるのが②パフォーマンス課題の提示方法である。まず、課題提示の際に必要な文構造・言語表現を明示するか否かで難易度に違いが出てくるだろう。第1次案では、中学案パフォーマンス課題文の中に文構造や表現が例示されているものがある一方、高校案では内容について留意すべき点が示されているのみである。また、「ルーブリック」や作品例を生徒と共有することで、求められる文構造や表現、意識すべきポイントを伝える取り組みも行われている。こうした手立ては、学習につまずきが見られる生徒が課題を進める上で有効な手助けとなり、目の前の生徒の実態に応じて具体的な工夫が求められる。

### おわりに

前述のように、今回の第一次案では学習指導要領で示された学力像を各領域各レベルの「本質的な問い」に具現化することを試みた。しかしながら E.FORUM での議論において、学習指導要領におけるコミュニケーション能力重視の学力像の限界や問題点をそのまま孕んだスタンダードであり、基礎的な文構造の丁寧な理解といった視点に欠けているという指摘も受けた。スタンダード作成はこうした議論を活性化させる重要なプロセスであると改めて認識するとともに、今後はこうした議論を踏まえた改訂を行っていきたいと考えている。

<sup>1</sup> 文部科学省『中学校学習指導要領外国語 解説』7頁。

<sup>2</sup> 吉島茂訳編・大橋理枝（ほか）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』第2版、朝日出版社、2008年（初版2004年）。

<sup>3</sup> 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM『「スタンダード作り」基礎資料集』2010年、237-243頁。